第３章　香取市の歴史文化の特徴

１．歴史文化の概要

香取市の歴史文化は、北部を流れる利根川沿いの沖積平野と、南部に広がる下総台地と呼ばれる洪積台地という自然的、地理的環境の影響を大きく受けている。かつては北部に「香取の海」と呼ばれる内海が広がっており、沿岸に香取神宮が鎮座したことも相まって、独特の文化、経済圏が醸成された。徳川幕府による利根川東遷事業でその流路が変わると、低湿地帯は新田開発により陸地化し新島（しんしま）（十六島（じゅうろくしま））と呼ばれる地域が形成され、また、利根川舟運の発達により佐原や小見川が河岸場として経済的に発展するようになった。

一方、下総台地では樹枝状の谷津と起伏の小さな台地という耕作に適した環境で、集落が形成されるとともに、千葉氏の拠点や徳川幕府による馬牧が置かれるなど、変遷を経ていった。

香取市の概要と歴史的背景

章	項目	概　　要
第1章	（社会的状況）	・平成18年（2006）3月27日、1市3町が合併し香取市となる ・千葉県北東部に位置（茨城県と隣接） ・東京から70km圏内、成田国際空港から20km圏内 ・面積262・35㎢は県内第4位（東西約21.2km、南北約22.7km） ・農業生産額は県内2位、米の生産量は県内1位
	（自然的・地理的環境）	・利根川沿いの沖積平野と下総台地と呼ばれる洪積台地に二分 ・最高標高は52mで全体に平坦であり、気候的に温暖 ・北部の水郷地帯や南部の山林、畑地など豊かな自然環境 ・台地に樹枝状に刻まれた谷津 ・利根川、大須賀川、小野川、黒部川、栗山川
	（歴史的事象）	・北部に「香取の海」と称する内海が存在（香取神宮・鹿島神宮鎮座） ・江戸幕府による利根川東遷事業 ・新田開発と新島（十六島）の形成 ・明治31年鉄道の敷設（佐原まで） ・利根川改修、横利根閘門の建設 ・両総用水の建設
第2章	（１）原始	・「香取の海」広大な内海を中心とした文化圏を形成 ・多くの貝塚、台地上や利根川の堤防上に縄文時代や古墳時代の遺跡
	（２）古代	・香取の海 ・香取神宮、鹿島神宮の鎮座 ・平将門と平良文
	（３）中世	・香取の海に点在する津と海夫 ・牧野観福寺の建立 ・千葉氏一族の国分氏と東氏 ・下総型板碑の造立 ・佐原宿の形成
	（４）近世	・小見川藩の成立 ・利根川の東遷とその影響 ・新田開発による「新島」十六島の形成 ・佐原の繁栄 ・幕府直轄牧　油田牧の設置 ・栗山川流域の日蓮宗信仰 ・府馬の大クス
	（５）近現代	・新治県から千葉県へ ・利根川河川改修、横利根閘門 ・鉄道の敷設 ・水郷観光の隆盛 ・ベニコマチ ・佐原の町並み　重伝建地区の選定
	（６）祭礼行事と生活・文化	・独特な祭礼行事 ・十二座神楽と獅子舞、獅子神楽 ・式年祭 ・利根川や周辺河川から生まれた生活文化

※「第1章」及び「第2章 1.歴史的背景」から抽出

２．歴史文化の特徴

香取市域は、その自然的・地理的環境から、北部の利根川沿いの沖積平野と南部の下総台地と呼ばれる洪積台地に区分することができる。その上で、歴史的な事象とその変遷から、香取市の歴史文化の特徴は、Ⅰ.香取の海から生まれた世界、Ⅱ.利根川東遷と河岸の発展、Ⅲ.利根川と下総台地に広がる風景、Ⅳ.仏教文化の広がりと下総台地に刻まれた遺跡群、Ⅴ.下総台地のくらしと信仰・祭礼の５つに表現することができる。

Ⅰ. 香取の海から生まれた世界

かつて市の北部にあたる千葉県と茨城県にまたがる地域には「香取の海」と称される広大な内海が広がっていた。霞ケ浦や北浦、印旛沼、手賀沼にも及ぶ範囲で、この「香取の海」を中心とした文化圏が形成されていた。この広大な水域では、河川湖沼と結びついた人々の生活の営みと交流が行われ、古代から中世にかけて独自の歴史的世界が広がっていた。

縄文時代には、現在の利根川下流域には海水が流入し、周辺の台地上には大規模な貝塚群が形成されていた。中でも標識遺跡となった阿玉台貝塚や良文貝塚は国の史跡となっている。古墳時代には、利根川筋の低湿地で全長 123mを誇る大塚山古墳（前方後円墳）をはじめ黒部川や大須賀川周辺、小野川流域に数々の古墳が築造されている。

8 世紀中頃には、「香取の海」の南岸に香取神宮がすでに鎮座し、下総国一の宮として崇敬を集めるようになっていった。沿岸には多くの津が形成されたが、香取神宮はこの津で生活する「海夫」と称する漁民からも深い信仰を集め、その交易を保護した。

Ⅱ. 利根川東遷と河岸の発展

江戸時代前期に徳川幕府により進められた利根川の東遷により、舟運が発達し江戸と通じたことで物資の交易が盛んとなり、河岸として佐原や小見川は商業的に発展した。その町内で行われる佐原の山車行事や小見川の祇園祭は、歴史的町並みの景観とともに今に伝わる。

また、物資の交易とともに江戸との文化的な交流も進展したことで、伊能忠敬や佐藤尚中をはじめとして多くの学者や文人などを輩出するようになった。

Ⅲ. 利根川と下総台地に広がる風景

江戸時代の初めは低湿地であった利根川北部は、幕府の新田開発などにより、新島（十六島）が形成されると、水田が広がる水郷地帯独特の自然景観と生活文化が形成されるようになった。新島では、えんま（江間）と呼ばれる水路がはりめぐらされ、さっぱ舟と呼ぶ小舟での往来が主となっていた。

一方、利根川以南には下総台地が広がり、台地の間に樹枝状に谷津が形成され、大須賀川、小野川、黒部川、栗山川などの河川が流れている。その谷津や河川の周辺と台地上には、耕作地が広がり、水郷地帯である北部とは異なる風景を見ることができる。府馬地区にある天然記念物の府馬の大クスは、弘化 3（1846）年刊行の宮負定雄『下総名勝図絵』にも描かれている、当地域随一の巨木であり、地域の象徴として親しまれている。

Ⅳ. 仏教文化の広がりと下総台地に刻まれた遺跡群

古代から中世にかけて仏教文化が伝わり各所に寺院が建立されるともに、瓦の生産なども行われるようになった。また、供養のための下総地方独特の形式を持つ下総型板碑が多数造立され、近隣地域には見られないほどの板碑群を形成するようになった。

中世には、鎌倉幕府の有力な御家人であった千葉常胤の子、五男胤通が国分氏、六男胤頼が東氏を名乗り、市域に領地を持って本拠を設けた。現在、本矢作城跡や大崎城跡、森山城跡といった本拠跡が残されている。

近世に入ると、市域の多くの村々は徳川幕府領や旗本領となり、その支配を受けた。そして、市南西部の台地上に幕府直轄の馬牧である油田牧が置かれるようになった。その牧の一部である野馬込跡は当時の姿を良好な状態で残し、国の史跡となっている。

Ⅴ. 下総台地のくらしと信仰・祭礼
下総台地や新島地域には、徐々に村落が形成され、利根川や周辺河川の恩恵を受けながら、それぞれの地の環境に適した生活文化が生み出された。村々の神社祭礼では特色ある祭礼行事が行われるようになった。特に側高神社のひげなで祭や山倉大神や鮭祭りは他地域での類例が少ない行事である。また、各地で神楽も盛んに行われ、地域のつながりを深めている。市内中央部から西部にかけては獅子舞や獅子神楽が、東南部では十二座神楽が行われるなど、その分布が異なることも特徴である。 市の南部の栗源地域は、栗山川流域などを中心に日蓮宗、特に不受不施派の信仰が篤く、江戸時代には多くの日蓮宗寺院や檀林が開かれたところであり、本堂や山門などの建造物や、関連する資料が市指定文化財として残る。